

II-B-13

食道扁平上皮癌における接着因子 E-cadherin の発現と、転写制御因子 Slug の発現の検討

坂元 昭彦、夏越 祥次、内門 泰斗、奥村 浩、
松本 正隆、瀬戸山 徹郎、横枕 直哉、
有馬 豪男、愛甲 孝

鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科 腫瘍制御学・
消化器外科学

【目的】食道扁平上皮癌において接着因子 E-cadherin の発現減弱はリンパ節転移に関連することが知られている。近年、E-cadherin の発現を負に制御する転写因子 Slug が Snail family の 1 つとして報告された。今回、食道癌切除標本における E-cadherin、Slug の発現と臨床病理学的意義について検討した。【対象・方法】当科で切除された食道扁平上皮癌 203 症例を対象とし、切除標本を用いた E-cadherin と Slug の免疫組織染色を ABC 法で施行した。E-cadherin 発現の判定は癌細胞の発現強度と食道正常上皮の発現を比較し、同等あるいはそれ以上のものを Preserved、減弱例を Reduced とした。Slug の発現は 10%以上を陽性、10%未満を陰性とした。【結果】203 例中 E-cadherin 減弱例は 57% (115/203 例)、Slug 陽性例は 48% (98/203 例)に認められた。E-cadherin preserved で Slug 陰性の症例は、57 例(54.3%)、一方 E-cadherin reduced で Slug 陽性の症例は、67 例(68.4%)。E-cadherin reduced 症例、Slug 陽性症例は有意に予後の不良であった($P=0.005, 0.014$)。E-cadherin と Slug の発現の組合せでは、E-cadherin preserved 症例の中で、Slug 陰性例は陽性例に比較して優位に予後が不良であった($P=0.035$)。

【結語】E-cadherin 発現だけでなく、E-cadherin 発現と組み合わせることにより食道癌の悪性度予測に有用と考えられた。

II-B-14

食道癌組織におけるリンパ節転移関連性遺伝子としての matrilysin の発現について

藤田 昌宏¹⁾ ²⁾、佐藤 利宏²⁾、中尾 佳代²⁾、
滝口 紀子²⁾、武田 克己²⁾、山崎 亮子³⁾

¹北海道医療大学、²「恵佑会」臨床病理学研究所、

³道立旭川療育センター

(背景) これまで食道癌の DNA アレイによる遺伝子の解析において諸臓器癌組織における発現と臨床像とに強い関連性を示すといわれる MMPfamily のメンバーである matrix metalloproteinase-7(matrilysin) が予後不良例に発現する成績を発表してきた。今回、食道癌の病理形態像におけるリンパ節転移の分子生物学的危険因子として matrilysin の関与の可能性について検討し、同時にリンパ節転移と臨床病理学的考察も行った。

(方法と結果) 前治療なく扁平上皮癌と診断された切除例から sm 癌 217 例、m 癌 57 例を対象とした。腫瘍最深先進部位における matrilysin の発現をモノクローナル抗体による免疫染色を用いて検索し、各種臨床病理学的因子 (年令、性別、局在、腫瘍径、肉眼型、分化度、深達度、ly、v、sm 進展部分の腫瘍の大きさ、組織異型度、簇出の有無) とともにリンパ節転移との関連性を検討した。sm1 が 30 例、sm2 114 例、sm3 73 例については、リンパ節転移陽性が 86 例、陰性が 131 例で 5 年生存率は 55%、80%と有意の差がみられた。ly 因子陽性は n(+)群対 n(-)群で 43:26 と有意の差で相関が認められたが v 因子ではその差は明らかなものではなかった。腫瘍先進部における matrilysin の発現率は深達度が増すほど増加し、n(+)群に 55.8%、n(-)群に 30.7%と有意の差がみられた。m 癌 57 例は EMR による切除によるもので、いずれも m3 の深達であり、matrilysin の発現はすべて陰性であった。

(結果のまとめ) ly、深達度、簇出の有無、sm 浸潤部分の腫瘍の大きさ、matrilysin の発現の有無に関連性があることが判明し matrilysin の発現の有無を検索することによりリンパ節転移の危険性を予知できる可能性が示唆された。